

40 陶芸家・フタムラヨシミ (2021年3月16日)

パリを拠点に活動されている陶芸家のフタムラヨシミさんは、日本で陶芸を学んだ後にパリで改めて陶芸の勉強をされました。フタムラさんの作品は、ブルゴーニュ地方で採れる土を使って作られていると伺って、少し意外に思いました。フランスの焼き物と言えば、セーブル焼やリモージュ焼といった磁器 (porcelaine) かファイアンス焼 (faïence) (※) を思い出し、フランスにも茶褐色の地肌を持つ焼き物を作る土があることを知らなかったからです。フタムラさんはグレ (grès) という陶器の一種を作る土を使っています。

日本には全国各地に焼き物の産地があります。有名な産地の一つである岡山県で生産されている備前焼は、茶褐色の地肌が特徴で、温かみを感じられます。



※ ファイアンス焼とは、淡黄色の土に釉薬 (ゆうやく) をかけて焼いた焼き物で、焼成温度が低い。南仏プロヴァンス、カンペール、ルーアン、ジアン、ストラスブルなど各地で作られており、絵付けされているものが多い。

フタムラさんの作品を拝見したときに、思わず「美味しそう！」と口にしてしまいました。焼きたてのパンのように見えたからです。もちろん食べられませんが、表面に白い粉を吹いたこんがりとした焼けたパンのように見えませんか？



フタムラさんによると、グレと磁器は焼成温度が異なるので、二種類の粘土を一緒に使って焼くことはできないと考えられてきました。しかし、フタムラさんの作品は、両方を同時に使って 1280 度で焼いており、その結果、磁器を作るための粘土を使った表面が白い粉のように仕上がります。パリにあるギメ東洋美術館の入口には、フタムラさんの作品が花器として飾られています。刷毛で作った表面の白い模様によって、焼き物が古木のように見えます。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

焼き物は、窯で焼くときに縮まることを計算して作られます。しかし、時には窯の中で予想していなかった亀裂が入ることがあります。フタムラさんは、これを「窯からのプレゼント」として、そのまま作品にすることもあるそうです。

フランス産の良質な土、フタムラさんの技術とデザイン力、そして時には「窯からのプレゼント」が融合して、これからも素敵な作品が生み出されていくことでしょう。